

野の花新聞

No. 10 2011年3月号 「別れ・長兄」

みなさま、こんにちは。

野の花の みなかた あきこ です。

少しずつ春らしい日が増えてきました。寒さでちょっと硬くなっていた心が、ゆっくり溶けていくような わくわくする気分になりませんか？自分を解き放ってあげたい季節ですね。

さて、今月は、少し重くなってしまうのですが、春の盛りに16歳で逝った長兄の話をさせてくださいね。



長兄とは12歳離れたきょうだいでした。きりっとしたハンサムな人で、私をかわいがってくれ、動物園や水族館によく連れて行ってくれました。

次兄は長兄ほど遊んでくれなかったの、自然、私は上の兄にいつもまつわりついていました。

どんなにうるさくしても しつこくしても、怒られたという記憶がありません。(次兄とは、天井が落ちてくるんじゃないかというくらいけんかをしていたらしいのですが)

毎朝自転車を押して家を出る兄を、いつも手を振って見送っていました。

その日の朝も、いつもどおり手を振って学校へでかけて行ったのに、兄は帰って来ませんでした。

家の中がざわざわしているのに凍りついている・・・父も母も どこかへ出かけたきり、帰って来ない・・・誰も何も答えてくれない・・・夜遅く、次兄がラジオを聴きながら泣いていました。海の遭難のニュースのあと、ラジオから聞こえてきたのは、震える声でインタビューに答えている 父と母の声だったのです。

ずっと後になってから、私は何が起こったのかを知ることになりました。

兄は ボート部の仲間と明石海峡に漕ぎ出したのですが、高波にあい、ボートが転覆したのです。いったん岸に泳ぎ着いたものの、泳げない部員がまだ戻っておらず、キャプテンだった兄は また海に戻って・・・そして二人とも力尽きて沈んでしまったのだと。

兄は もっと生きてかったですでしょうか・・・

いいえ、たとえ短くても、自分の決めた人生を生ききったのだと 私は思います。

兄を失った痛みは消えないけれど、せいっぱい生きて逝った兄を 誇りに 思います。

ふう

リラックスしてる時の ふうは

たいてい

変顔です・・・

